

【史料】

「町内記録」にみる近代京都町自治の変遷（一）

——手洗水町における大正・昭和戦前期——

西村 卓
奥田 以在

はじめに

今回翻刻・紹介する「町内記録」（以下、「本記録」とする）は、京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町において、明治四四（一九一）年七月から昭和一六（一九四一）年四月までの同町における町運営に関わる諸事を記録した冊子である。同資料は、現在、京都府立総合資料館に所蔵されている「館古五五九 手洗水町文書」中の一点（No.七八）である。形状は横一六センチメートル、縦二三・三センチメートル、表紙、裏表紙を入れ白紙を除いて、一〇六丁ほどの冊子である^{1）}。

この時期以前の「記録」の存在も考えられるが、京都府立総合資料館と同志社大学人文科学研究所に分散所蔵された同町文書を検索しても、「本記録」のような形での「記録」は残っており、明治期の町自治運営の時系列での実相を追うことができないのは残念である。

「本記録」は明治四四（一九一）年七月一日から書き始められている。祇園祭での同町神事の真つ最中、「御旅所参詣」の記録からである。「本記録」では、それほど明示的に記述されていないが、後述するように、この年は烏丸通の拡張と京都市営電気鉄

道敷設のための、いわゆる「三大事業」が進行しており、同町の景観が大きく変貌するとともに、町内住民構成も借家層の激減により大きな変化を受けることになるのである。また、そのあとに続く大正・昭和期には、同町に銀行金融企業の支店が次々進出し、同町が金融街化していき、職住分離・通勤型地域に変貌するなかで、町自治の主な関心が町資産管理と年中行事に偏った姿を「本記録」から垣間見ることになる。

同町は、戦時町内会体制への移行のなかで、昭和一五（一九四〇）年一月に南隣町である^{たがひな}笋町と合併し、烏丸南町第一隣組として辛うじて存続することになったが、それを書き留めた記事は、淡々としながらも、苦汁に満ちた記録者の息遣いが聞こえてくるようである。金融街としての繁栄と住民自治組織としての衰退を象徴するような出来事であった。

「本記録」は京都市中における一つの町の事例とはいえ、住民の自治組織である町が、都市近代化という大きな流れのなかで、明治末から昭和戦前期にかけて、どのような変貌を遂げ、その自治をどのように保持しようとしてきたかを垣間見る、格好の資料と言えるであろう。以下、内容に即して少し考察を加える。なお、「本記録」は大部でもあり、二つに分割して収録することとした。本稿では昭和四（一九二九）年一月までを収録した。

一 戦時町内会体制への移行と手洗水町

戦時町内会体制への移行は、昭和一五（一九四〇）年九月一日の内務省訓令第一七号によって始まり、町内会・部落会・隣保班（隣組）・市町村常会の設置が全国的に進められていくことになる。これを受け、京都市では同年一月二三日に「京都市町内会設置標準」⁽²⁾が告示された。これにより、一月二日以降、各区レベルで町内会の設置が行われ、昭和一六（一九四一）年一月一日に全市内レベルで町内会がつくられた。⁽³⁾設置された町内会を数で確認すると、昭和一七（一九四二）年一月二時時点で、三六五一の町内会、二万五三八三の隣組が結成された。⁽⁴⁾「京都市町内会設置標準」で示された町内会の規模は、「概ネ五〇世帯乃至一〇〇世帯」（第三條）

であったが、手洗水町は「戸数あまり二少数」のため笋町と合併することとなったのである。

この手洗水町の戸数の減少は、都市機能の近代化の過程で生み出されたものであった。手洗水町の中央を走る烏丸通は、明治四四（一九一）年、京都市三大事業のひとつである道路拡充事業（道路拡充および電気軌道の敷設）によって、五間から一五間に拡充された。これにより、手洗水町は町域を大幅に失い、住民構造にも多大な影響を受けたのである。すなわち、借家数の大幅な減少である。具体的に示せば、明治四三（一九一〇）年に家持（不在家持を含む）二三名、表借家人一九名、裏借家人一九名であったものが、道路拡充後の明治四四（一九一）年には、家持（不在家持を含む）二二名、表借家人六名、裏借家人四名となったのである。⁵⁾つまり、笋町との合併の要因となった戸数の減少は、この道路拡充事業に由来するのである。このように、インフラ整備という都市機能の拡充は、住民に「便利さ」を付与する一方で、町の側からとらえた場合、町の空間的分断と住民の「追いだし」により、町の自治機能を弱体化させるという側面を持っていたのである。

こうして、昭和一五（一九四〇）年二月四日、手洗水町と笋町は合併し、新たに烏丸南町となったが、この際、「八坂神社之神事」＝御手洗井の神事と共有財産については併合せずに、旧手洗水町が烏丸南町の第一隣組として引き継ぐことが申し合わされている。京都の町は、それぞれが独立した存在で、町ごとに規約を作成するなど独自性が強いが、戦時町内会体制へ移行し、新たに町内会が結成されても、伝統的な行事はあくまで旧町によって執り行うというこの申し合わせも、京都の町の独立性の高さを示していると言える。さらに言えば、旧町の消滅という事態に直面した手洗水町が、最後に維持しようとしたものは、御手洗井の神事と共有財産だったのである。この事実は、同町における協同性を形作ってきたものの核として、御手洗井の神事が据えられてきたことをも示していると言える。

二 「町内記録」の空白期間

「町内記録」は、大正七（一九一八）年四月の「明倫小学校創立五拾年記念祝賀融資金」一覽以降、昭和三（一九二八）年まで記録されなかつた。記録の再開は、町内総代であつた井上久左衛門の死去と、それにともなう総交代の記録から始まり、町内共有財産の確認、帳簿類の確認、町経費集金の金額の明細と各個人の負担額一覽、代人料の一覽、年中行事の一覽が記録された。町総代の死去という緊急事態が記録再開のきっかけの一つであつたと思われるが、その他の要因として、大正期の手洗水町の性格の変化と社会経済状況の変化との関連についても若干の考察を加えておきたい。

前述の通り、明治四四（一九二一）年に烏丸通が拡幅され、翌四五（一九二二）年六月一日には、京都市営電気鉄道が開業し、烏丸通では塩小路通から丸太町間での運行が始まつた。この時には、千本大宮線、丸太町線、四条線も開通しており、手洗水町のすぐ近くに位置する四条烏丸は、京都の市内交通の要所となり始めていた。市営電気鉄道は、大正七（一九一八）年に私鉄であつた京都電気鉄道を買収し、乗客数が飛躍的に増加することとなる。

また、第一次大戦の好景気の下、京都は有力銀行の預金獲得地として位置付けられ、支店が設立されて、預金獲得競争が展開した。⁶ 手洗水町でも、この時期に浪速銀行が進出し、近江銀行も不動産を買い増ししている。このような中で、同町は通勤型金融街へとその姿を変貌させ始めることとなる。この金融街化により、手洗水町は町財政においても金融関係業者への依存傾向が強くなつていくのである。「町内記録」がいったん途絶えるのはまさにこの時にあたり、町の金融街化という性格の変化と何らかの因果関係があることが予想される。

さらに、記録が再開される昭和三（一九二八）年の前年には、金融恐慌が勃発している。この時、近江銀行の京都支店、寺町支店、室町出張所、三条出張所が三週間休業し、十五銀行も休業した。⁷ この二行はともに手洗水町に支店を持っていた。つまり、町財政を支えていた金融関係業者を襲つた金融恐慌の影響に鑑み、改めて町財政、町自治のあり方を再確認したということが推論される

のである。しかし、この点については、今後さらに検討を加える必要があるだろう。

三 昭和初期の町自治

手洗水町の町自治について詳細に記述されている資料としては、明治二二（一八八九）年の「規約証」がある。⁸⁾しかし、それ以後はまとまった記録が残っておらず、「町内記録」は大正・昭和初期の町自治を知る上で貴重な資料である。ここでは、年中行事について若干の考察をしたい。

昭和三（一九二八）年の記録再開時に記された年中行事は、一月 親睦会、三月 施餓鬼、四月 御千度、六月 半季決算、七月 神事（御手洗井の神事）、九月 施餓鬼、一〇月 御千度・時代祭、十二月 半季決算・井戸掃除・七五三飾となっている。これを前記「規約証」と比較すれば、伊勢講がなくなり、一月の新年宴会が親睦会として記され、一〇月には時代祭が加えられている。まず、親睦会についてみてみたい。親睦会については、「町内記録」の昭和五（一九三〇）年の記載に、「親睦会新御入会者」として二名が記載されている。つまり、親睦会は任意の入会組織として存在していたのである。新年宴会は、町全体の年中行事として執り行われていたが、それが加入者のみによって執り行われる行事に転化しているのである。設立時期は不明であるが、大正四（一九一五）年に「新年会」という記述があることから、これ以降、昭和三（一九二八）年の間に設立されたものと考えられる。

このような町内の懇親をはかる任意の組織は、他町でもみることができる。例えば、六角町（中京区新町通六角下ル）では、大正一二（一九二三）年に町内懇親会という任意の組織が作られている。六角町では、町内懇親会は遊山会を執り行うための組織として発足し、昭和四（一九二九）年に新年宴会に適用が拡大されることとなった。⁹⁾第一次大戦後の反動恐慌から昭和恐慌にかけてのこの時期に、町というコミュニティの共同性に何らかの変化が起きていることが推測される。

次に時代祭の問題について触れておきたい。時代祭は、明治二八（一八九五）年の平安奠都千百年紀年祭に平安神宮が建立された

際に記念事業として始まった祭である。したがって、町に伝統的に根付いてきた年中行事ではなく、新興の祭であるといつて差し支えないだろう。しかし、手洗水町ではこの時代祭が町の年中行事のひとつとして認知されて始めているのである。

四 戦時下の京都

日中戦争が全面化した昭和一二（一九三七）年以降の戦時体制期に、従来の町々共同組合が戦時町内会・隣組制度に再編され、人物を戦争遂行のために動員する体制が着々と進められるなかで、手洗水町は、市内第一等の金融街としての外見を見せる一方で、住民が生活し協同しあう場々町としての実態を薄めてゆき、昭和一五（一九四〇）年一二月の南隣町等町との合併により、一端は消滅する運命をたどったのである。

「本記録」からは、それ以降の戦時体制下において、どのような形で戦争動員の受け皿として町内会・隣組が役割を果たすのか読み取ることができない。しかし、我々はこの時期の京都市民が町内会・隣組という場でどのような生活を送り、戦争を耐えぬいたかといった問題へ思いを馳せる必要があるだろう。

我々は、戦時体制期に、京都市民が自らの生活の場で書き残した日記・日誌類に出会うことができる。⁽¹⁰⁾

いま手元に、演習生が卒業研究のためのフィールドワークの途中に出会った日誌がある。豆腐の製造販売を生業にしていた豆腐店の店主が、戦時期に書き残していたもので、淡々とした行商の記録とともに、日々戦争の色を濃くしていく京都の街の姿をこれも淡々と書きとめているのである。⁽¹¹⁾ 我々は、京都の街とともにそこで生活する人々を町という自治単位から眺めてきたが、今まで明らかにされてきた近代京都町の姿を、さらに多様性のなかでとらえる作業を続けるとともに、人々の生活の単位である家族、さらには、個としての生活者の側から、京都をとらえ、日本をとらえ、世界をとらえる視点を育み鍛えて行かねばならない。この日誌の翻刻を次の課題としたい。

おわりに

以上、今回紹介した資料は、明治四四（一九一一）年七月から昭和一六（一九四一）年四月までの手洗水町における町運営に関わる諸事を記録したものである。「本記録」を丹念に歴史的経過と照らし合わせながら吟味すると、明治末から大正期にかけて、京都の風景を大きく変えた三大事業を契機として、金融街化を急速に加速化させていく町の姿を垣間見ることができであろう。

我々は、この歴史的経過を町の側から考察した場合、町という地域住民組織における協同性や相互扶助、そして相互規制という自治の在り方が、都市の近代化、インフラの整備という名のもとに、大きく変形を余儀なくされていく姿を看取することになる。手洗水町は、戦時町内会体制のもとで、戸数の僅少ゆえに町としての自立が否定され、隣町と合併することで、一時とはいえ町の消滅を経験することになった。しかし、その中でも旧町の共有財産と、文字通り町の紐帯のシンボルの役割を果たした御手洗井の神事は、「従来之通りニなし併合せず」としたのである。我々が町自治という問題をどの視点からとらえるか、その名が消滅した時に取った手洗水町のこの処し方が、一つの答えを与えていると考える。

註

- （一） 同町文書に関しては、「近代京都における町自治と規約―手洗水町を事例として―」（同志社大学『経済学論叢』第六二巻第四号、二〇一一年三月）所収「解題」参照。
- （二） 京都市市政史編さん委員会編『京都市政史 第四巻 資料 市政の形成』（京都市、二〇〇三年）には第二六条までが収められ、財団法人東京市政調査会編『五大都市町内会に関する調査』（財団法人東京市政調査会、一九四四年）には全文が掲載されている。
- （三） 京都市市政史編さん委員会編『京都市政史 第一巻 市政の形成』（京都市、二〇〇九年）、五五四頁を参照。

- (4) 前掲財団法人東京市政調査会編、統計表、一頁、第一表を参照。
 - (5) 『館占五五九 手洗水町文書』No.八七「神事勘定帳」(京都府立総合史料館所蔵)を参照。
 - (6) 高橋真一『京都金融史』(京華日報社、一九二五年)、平井瑛吉『京都金融小史』(内外出版印刷、一九三八年)、名武なつ紀『「預金地」京都金融市場の形成過程―大正期の分析―』(『経済系』第二四六集、二〇一一年)、参照。
 - (7) 石井寛治「近江銀行の救済と破綻」(石井寛治・杉山和雄編『金融危機と地方銀行―戦間期の分析―』東京大学出版会、二〇〇一年)、前掲名武、参照。
 - (8) 西村卓・奥田以在「近代京都における町自治と規約―手洗水町を事例として―」(『経済学論叢』第六二卷第四号、二〇一一年)に「規約証」の全文を翻刻している。
 - (9) 奥田以在「近代京都山鉾町における町自治―住民自治から『適任者』自治へ―」(『経済学論叢』第六二卷第三号、二〇一〇年)、参照。
 - (10) たとえば、戦中戦後に書き残していた田村恒次郎の日記の翻刻本『辛酸―戦中戦後・京の一庶民の日記―』(岡光夫編集・解題、ミネルヴァ書房、一九八〇年)は、古書即売会に出品されていた田村の日記を岡光夫氏が発見したことが縁であった。
 - (11) 二〇〇九年度西村卓演習卒業研究「豆腐行商から見る生活都市京都」(飯島輝、西川奈緒、岡本圭浩、柴田悠一朗、田丸順之、米澤理恵子執筆、草稿)、参照。
- * 解題は、西村(はじめに、四、おわりに)と奥田(一、二、三)が分担執筆した。
- なお、本稿は、平成三三年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))研究題目「近代京都における住民自治組織Ⅱ」「町」の基礎研究)における成果の一部である。

凡例

- 一 資料の翻刻にあたっては、適宜句読点を付し、漢字は常用漢字を原則とし、それ以外の漢字は原文通りとした。
- 一 略字、合体字、異体字は、ひらがな、カタカナ、常用漢字体に直した。ただし、変体仮名の而、江、者および而已は、その字體を残し、字のポイントを落とした。
- 一 底本で判読不能な文字がある場合は、その字を□で示した。
- 一 抹消された箇所はその部分は――で消し、訂正がある場合はその右傍に訂正された文字を付した。
- 一 朱書は、その箇所を「」で囲み、「朱書」と傍注した。
- 一 翻刻者の附けた注記は、すべて「」を付した。

〔表紙〕

明治四拾四年亥七月起

町内記録

甫

七月拾八日 晴天

一 午前九時頃ヨリ御旅参詣、人員八平井氏、井上氏、斎藤氏、安田氏、川嶋氏、吉田氏、柴垣氏
但シ、富田氏隠居死亡ニ付、本日八午前ニ参詣ナル

同 廿九日 晴天

一 神事勘定集会、午前九時頃ヨリ正午頃退散、出席員平井氏、井上氏、安田氏、^榎川嶋氏

九月 廿日 曇

一 道路葛石之件ニ付、午前九時頃ヨリ集会、正午頃退散、出席員平井氏、井上氏、斎藤氏、安田氏、富田氏、^ノ五名

同 廿一日 終日雨降

一 午后早々ヨリ誓願寺ニテ施餓鬼御勤、参詣員平井氏、井上氏、斎藤氏、加藤氏、安田氏、柴垣氏、川嶋与三郎氏
金沓円 施餓鬼料 金拾銭 誓願寺茶料

拾月七日 晴天

一 御千度ニ付、午后早々ヨリ八坂神社へ参詣、行事ハ斎藤氏之処、臨時差支へ出来候ニ付不参、参詣員平井氏、井上氏、安田氏、吉田氏、川嶋氏、柴垣氏、借家不残
借家行事ハ木村庄太郎氏

拾月拾七日 晴天

一 伊勢講ニ付、午后三時ヨリ集会、六時過退散、出席員平井氏、井上氏、斎藤氏、加藤氏、富田氏、安田氏、川嶋氏

膳部ハ、蛸薬師島弥ニテ金五拾錢之弁当仕立段組ト、三条井筒ニテ金拾錢宛之寿シ皿盛

吉田氏、井上氏、不参ニ付、膳部送ル

但シ、本年代参ハ斎藤氏、井上清氏之处、井上清氏差支有之ニ付、平井氏ト繰換ニナル

拾一月三日 晴天

一 天長節ニ付、学校ニテ祝賀式挙行、跡ニテ祝宴有之、栄吉ヲ代リニ遣ス

拾二月五日 晴天

一 町内半期勘定集会、午前九時頃ヨリ午后貳時頃退散、出席員平井氏、井上氏、斎藤氏、安田氏、四名、中飯之節吉儀ニテ参拾錢之弁当五個、伏見屋ニテ白菊一升取

拾二月廿一日 晴天

一 町総交代代ニ付、午后早々より集会、同三時頃退散、就職斎藤氏、退職平井氏、立会人井上氏、安田氏等ナリ

四拾五年一月一日 曇 午后二時過より小雨降

一 午前六時過より年頭礼ニ町席へ集会、八時過退散、出席員斎藤氏、井上氏、平井氏、加藤氏、安田氏、富田氏、川嶋与三郎氏
メ七名

一月三日 晴天

- 一 町内新年会ニ付、午后貳時過より町席へ集会、夫ヨリ高台寺前田舎亭行、出席員齋藤氏、井上氏、平井氏、安田氏、富田氏、吉田氏、川嶋与三郎氏ノ七名 外ニ栄吉ヲ連ル

三月八日 晴天

- 一 手洗井戸敷地之内、祖父江氏より宅地壹坪五合式勺ヲ代金貳百五拾八円ニテ買収、登記済ニ付、金員受渡之件ニ付集会、午后六時頃ヨリ拾時頃退散、出席員齋藤氏、井上氏、平井氏、安田氏、富田氏、祖父江氏代リ市三郎氏ノ六名

三月拾八日 晴 午前拾時頃曇リ
午後ハ折々小雨降

- 一 祠堂之施餓鬼誓願寺ニテ勤トメ、施餓鬼料金壹円、同寺茶料金拾銭
参詣員齋藤氏、井上氏、平井氏、富田氏、安田氏、栄吉トモノ六名、供養ハ津の利ニテ金五拾銭宛之折詰ニテ円山公園へ行

四月拾三日 晴天

- 一 八坂神社へ御千度ニ付、午后早々より参詣員齋藤氏、井上氏、平井氏、加藤氏、安田氏、吉田氏、川嶋氏、柴垣氏、外借家ハ不残

六月拾八日 晴天

- 一 町内半期勘定ニ付集会、午前拾時前ヨリ拾一時過退散、出席員齋藤氏、平井氏、井上氏、安田氏ノ四名

七月拾二日 晴天

一 神事吉符入ニ付、午后貳時頃ヨリ集会、五時過退散、出席員斎藤氏、平井氏、加藤氏、安田氏、富田氏、吉田氏、祖父江氏代柴垣氏、行事ハ井上氏、井上清氏メ九名

肴ハ規定ノ外、姉小路伊勢宗ニテ取、肴鉢肴造リ身三品テ金五拾五錢、寿シハ三条井筒ニテ箱ずし七切宛

九月五日 晴天

一 明治天皇御大葬ニ付、自身番及幕提燈之件ニ付集会、午前拾時頃ヨリ正午頃退散、出席員斎藤氏、井上氏、平井氏、安田氏、祖父江氏代リ柴垣氏、富田氏、近江銀行、川崎銀行メ八名

一 御大葬ニ付、九月拾三日ヨリ、同拾五日迄、各町共自身番執行并ニ白高張提灯及各戸トモ黒幕ヲ張ル

拾三日夜、自身番へ出張人名

吉田 善次郎殿 近江銀行殿

川崎銀行殿 中村 佐七殿

木村 庄太郎 猪野 甚七殿

栄 吉

拾四日夜

安田 太七殿 富田 嘉兵衛殿

祖父江重兵衛殿 潮田 喜一殿

実業銀行殿 岩崎 亀太郎殿

栄 吉

拾五日夜一時迄

斎藤 茂兵衛殿

井上久左衛門殿

平井 常次郎殿

吉田 宗吉殿

吉見 金次郎殿

ミシン会社殿

栄 吉

九月拾六日 晴天

一 御大葬二付、諸入費計算ノ集会、午后一時過より六時頃迄、出席員斎藤氏、井上氏、平井氏、安田氏、四名

九月廿日 曇

一 町内祠堂之施餓鬼、午后早々ヨリ誓願寺ニテ勤ムル、参詣員斎藤氏、井上氏、安田氏、加藤氏、富田氏、吉田氏、栄吉トモ

一 金壹円

施餓鬼料

一 同拾銭

茶料

一 同式円拾式銭五厘

諸経費

外ニ弁当ハ自弁ノ事

三月拾一日 晴天

一 近江銀行所有地之内式拾七坪七合六勺ヲ、一蓮社町富田正太郎氏へ売却二付、午前拾時過より帳切二付集会、拾式時前退散、

出席員井上氏、斎藤氏、平井氏、安田氏、富田氏、祖父江氏代理、川崎銀行代理、外ニ売主近江銀行代表者馬場新三氏、買主富田正太郎氏

右ニ付、富田氏ヨリ出金、左ニ

一金拾円也 手洗井積立金

一金貳円 用人栄吉祝儀

一同壹円 ふでへ同上

三月拾八日 午前曇、午后雨降

一 春季彼岸施餓鬼誓願寺ニテ勤ムル、午后早々より参詣員井上氏、平井氏、安田氏、祖父江氏代り、栄吉トモメ五名、富田氏、吉田氏ハ不参ニ付、御供養送ル

六月九日 晴天

一 町内前半期勘定ニ付、午后早々より集会、三時過退散、出席員井上氏、斎藤氏、平井氏、安田氏メ四名

八月二日^(七カ) 晴天

一 神事吉符入、午前九時過より出席、十二時過退散、出席員井上氏、斎藤氏、平井氏、安田氏、富田氏、祖父江氏代り、木屋町有楽庵ニ而御膳并当五拾錢宛、外ニ鱧ノ皮トあさうりなます、内ニテ拵ル酒ハ世界長三升、行事ハ平井氏、吉田氏

(七カ)
八月五日 晴天

一 手洗井参詣、午前四時頃ヨリ、出席員吉符入ノ節ト人員同ジ

同 七日 晴天

一 午后二時過より神輿御伴、行事吉田氏栄吉ヲ連ル

同 八日 晴天

一 午前九時過より御旅参詣、帰路姉小路伊勢長ニテ中飯、参詣員井上氏、斎藤氏、平井氏、安田氏、富田氏、吉田氏、祖父江氏代り、栄吉トモノ八名

同 拾四日 晴天 午后五時頃夕立雨降

一 神輿御伴、行事平井氏代り栄吉ヲ送ス

九月廿一日 晴天

一 町内祠堂之施餓鬼五条坂袋中庵ニテ勤ムル、参詣員井上氏、斎藤氏、平井氏、加藤氏、安田氏、祖父江氏代り、栄吉トモノ七名

供養ハ伊勢長ニ而金五拾五錢ニテ折詰、誂席ハ知恩院山門前茶店、酒は世界長式升

一 金壹円五拾錢 袋中庵施餓鬼料

一 同五拾錢 同供養料

一 同貳拾錢

同茶料

一 同八拾錢

知恩院山門前席料雜費トモ

一 同壹円六拾錢

世界長式升代

ノ

但シ、弁当ハ自弁ノ事

拾月四日 曇

一

町内八坂神社へ御千度、午后早々より参詣員井上氏、斎藤氏、平井氏、加藤氏、安田氏、富田氏、川嶋氏、行事祖父江氏代御足所ハ、知恩院山門前茶店

支出ハ御千度帳ニ記載ス

拾月拾七日 晴天

一

伊勢講ニ付、午后式時頃ヨリ集会、六時頃退散、出席員井上氏、斎藤氏、平井氏、安田氏、吉田氏、井上清氏、ノ七名伊勢長ニテ膳部御飯付、金壹円宛ニテ詔ル

酒ハ世界長印 三升五合

外ニ 金貳拾錢 御神酒代

同貳拾錢 油茶炭雜費

同三拾錢 給仕人弁当代

本年代参ハ、加藤氏、井上清氏両名之処、加藤氏差支有之ニ付、井上清氏壹名ニテ代参ナル

十二月拾二日 晴天

一 后半季勘定ニ付、午后貳時頃ヨリ集会、同五時前退散、出席員井上氏、齋藤氏、平井氏、安田氏、富田氏、五名

十二月廿二日 晴天

一 町総交代代ニ付、午后貳時頃ヨリ集会、四時過退散、就職安田氏、退役井上氏、立会人齋藤氏、平井氏

大正三年一月一日 晴天

一 午前六時頃ヨリ集会、新年挨拶、同拾時頃退散、出席員安田氏、井上氏、齋藤氏、平井氏、富田氏、川嶋氏、祖父江氏代、七名

三日 晴天

一 新年宴会、午后二時頃ヨリ姉小路伊勢長へ、出席員安田氏、井上氏、齋藤氏、平井氏、富田氏、祖父江氏代、栄吉トモ、七名

一月拾七日 晴天

一 吉田善次郎氏所有ノ地所建物トモ、新町蛸葉師下ル百足屋町有野康之氏へ売却ニ付、午前十時頃ヨリ集会、午后一時頃退散、出席員安田氏、井上氏、齋藤氏、平井氏、富田氏、川嶋氏、祖父江氏代玉村氏、近江銀行代平野氏、川崎銀行代熊井氏、拾名
外ニ吉田氏、有野氏

二月拾貳日 晴天

一 齋藤氏借家、平井仁兵衛借家、木村庄太郎持家、今般山口銀行へ売却二付集会、出席員安田氏、井上氏、富田氏、祖父江氏代玉村氏、近江銀行代平野氏、川崎銀行代熊井氏、外ニ木村氏、平井仁兵衛氏ノ御手代

三月拾八日 午前中小雨降、午后ハ曇天トナル

一 町内祠堂ノ施餓鬼誓願寺ニテ勤メル、午后早々より参詣員安田氏、井上氏、齋藤氏、平井氏、富田氏、加藤氏、祖父江氏代、后席ハ山口銀行より御招キニ付、瓢亭へ行、川嶋氏ハ不参ニ付、膳部送りニナル

三月三拾一日 晴天

一 山口銀行へ前記八名より御祝ニ世界長印酒五升、真頼料トシテ金五円送ル

四月四日 曇

一 御千度ニ付、午后早々より八坂神社へ参詣、御家持及御借家等不残、富田氏ハ不参

一 昭憲皇太后崩御ニ付、五月廿四日、廿五日、廿六日三日間、町中黒幕ヲ張り、白張提灯ノ高張ヲ出ス、右ニ付、各町トモ自身番ナス事、但シ、自身番ハ廿四日、廿五日両夜限り

廿四日午后六時過より廿五日午前四時過迄、出席者安田氏、井上氏、祖父江氏、平井氏、川嶋氏、齋藤氏、富田氏ノ七名
廿五日午后六時過より拾二時迄、出席者古田万次郎氏、森宇左衛門氏、中井喜一郎氏、松田道作氏、山口銀行氏ノ五名
廿五日夜拾貳時より廿六日午前四時過迄

出席者

近江銀行氏

木村庄太郎氏

中村佐七氏

酒井長次郎氏

松居馬三氏

岩崎龜太郎氏

川崎銀行氏

メ七名

拾月拾七日 晴天

一 伊勢講ニ付、午后式時過ヨリ町内ニテ執行、出席員安田氏、井上氏、平井氏、加藤氏、富田氏、井上清氏、代參ハ加藤氏、富田氏等ナリ

膳部ハ、姉小路伊勢長ニテ壺名分金壺円之誂、酒ハしら菊式升
斎藤氏、川嶋氏ハ不參ニ付、膳部送ル

拾月廿四日 晴天

一 町内御千度ニ付、午后早々ヨリ八坂神社へ參詣、家持參詣員安田様、井上様、平井様、加藤様、川嶋様、祖父江様等ナリ、借家ハ不殘

休足所ハ双林寺茶店

拾二月拾一日 曇

一 午后早々ヨリ町内半季勘定寄合、三時過退散、出席員安田氏、井上氏、斎藤氏、平野氏、富田氏メ五名

同 拾四日 晴天

- 一 町総交代退職安田太七氏
就職平井常次郎氏 立会人井上氏

大正四年一月一日 晴天

- 一 午前六時過より年頭ノ挨拶ニ打寄り、同拾時過退散、出席員平井氏、井上氏、斎藤氏、安田氏、富田氏、川嶋氏、祖父江氏代

同 一月三日 晴天

- 一 町内新年会午后三時頃ヨリ町内ニ打寄り、姉小路伊勢長ヘ行、出席員平井氏、井上氏、安田氏、祖父江氏代リ、栄吉トモメ五名、膳部訛ハ、金老円三拾錢宛、尤自弁

拾月拾七日 晴天

- 一 例年ノ通伊勢講ニ付、午后貳時頃ヨリ集会、五時過退散

出席員平井氏、井上氏、斎藤氏、安田氏、富田氏、川嶋氏

本年より加藤氏ハ退会、祖父江氏入会ナル

代参平井氏、川嶋氏当番ノ処、川嶋氏差支有之ニ付、平井氏ト安田氏参詣ナル

有楽樓ニテ六十錢ノ折詰、酒ハ特製ノ白菊三升、外ニシ、め汁

井上清氏、祖父江氏不参ニ付、折詰送り

- 一 今般聖上陛下京都ニ於テ御即位式被為行、右ニ付、拾一月七日京都ヘ御幸被遊候ニ付、御滞在期間中、各町々自身番執行、当

町内ハ日毎ニ四名宛交代ニテ勤ムル事

自身番ハ御着京前日より御還行翌日迄「十一月六日より十一月廿八日迄」

右ニ付、市内一般各戸新調之国旗及幕ヲ張、奉祝ノ高張提灯建ヲ出シ、日々終夜点灯ス、但シ、電灯ヲ用ユ

一 御大典中、数回提灯行列執行

一 陛下、烏丸通御通行ノ際ハ、人道及車道一面ニ筵ヲ敷キ公廊ノ拝觀ス

右筵ノ費用ハ、各町内ニテ負担ス、筵數ハ当町内計ニテ壹千式百枚ナリ

一 拾九日より廿五日迄七日間奉祝踊ト称シ、市内至ル処大賑イ

拾二月七日 晴天

一 御大典無滞相濟候ニ付、大津紅葉館ニテ慰勞会ヲ開ク

但シ、家中中發起ニテ有志金ヲ出シ、借家之人ヲ招待ス、借家出席ノ銘々より御酒トシテ各金毫円宛差出シニナル

一 今般八坂神社官幣大社ニ列セラレ候ニ付、奉祝祭費寄付金貳拾円献金ス、右ニ付、大正五年五月三日より七日迄五日間、氏子一般奉祝踊有之

一 今般八坂神社官幣大社ニ列セラレ候ニ付、奉祝祭費寄付金貳拾円町中ヨリ出金ス
右ニ付、大正五年五月參日ヨリ七日迄五日間、氏子一般奉祝踊有之

一 今般於東京ニ、明治天皇外苑設立費金三百万円ノ予定ニ付、全国中へ献金募集ニ付、京都府下ニテ金拾万円ノ予定ニ付、右献

金区役所より申来ル、右ニ付、当町内ヨリ献金及び人名、左ニ

一	金拾五円	井上久左衛門氏
一	同拾円	斎藤 茂兵衛氏
一	同拾円	平井 常次郎氏
一	同拾円	富田 嘉兵衛氏
一	同拾円	近江 銀行氏
一	同拾円	山口 銀行氏
一	同拾円	丸二 商店氏
一	同五円	井上 清三郎氏
一	同五円	川嶋与左衛門氏
一	金五円	祖父江重兵衛氏
一	同壹円宛	古田 万次郎氏
一		木村 庄太郎氏
一		酒井 弥王 ^{長次郎} 氏
一		堀 卯左衛門氏
一		神鳥 梅太郎氏
一		岩崎 亀太郎氏
一		松田 道作氏
一		宮川 利三郎氏

一 金五拾錢 中井 喜一郎氏

一 同三拾錢宛 山下 鉄四郎氏

一 同 田和 利一郎氏

一 同 福嶋 国太郎氏

一 同 角田 藤兵衛氏

一 同 山田 栄吉

計 金壹百円也

右、大正五年四月二区役所へ差出ス

一 今般八坂神社神苑拡張二付、寄付金左之通

一 金参百円 安田 太七氏

一 同貳百円 井上久左衛門氏

一 同壹百円 斎藤 茂兵衛氏

一 同壹百円 平井 常次郎氏

一 同壹百円 富田 嘉兵衛氏

一 同壹百円 祖父江重兵衛氏

一 同五拾円 川嶋与左衛門氏

一 同参百円 丸一商店氏

一 同参拾円 古田 万次郎氏

一	同參拾円	片山帝国商会氏
一	同參拾円	松田 道作氏
一	同參拾円	岩崎 亀太郎氏
一	同拾八円	木村 庄太郎氏
一	同拾八円	酒井 長次郎氏
一	同拾八円	堀 宇左衛門氏
一	同拾八円	神鳥 梅太郎氏
一	同拾貳円	山下 鉄四郎氏
一	同拾貳円	中井 喜一郎氏
一	同拾貳円	田和 利一郎氏
一	同九円	福嶋 政次郎氏
計	金壹千四百八拾七円也	

右、大正六年四月二申込書差出ス

明倫小学校創立五拾年記念

祝賀有志金

一	金拾五円	富田 嘉兵衛氏
一	同拾五円	平井 常次郎氏
一	同拾五円	安田 太七氏

一	同拾五円	井上久左衛門氏
一	同拾円	田嶋 昇次郎氏
一	同拾円	川嶋与左衛門氏
一	同拾円	祖父江重兵衛氏
一	同拾円	近江銀行氏
一	同拾円	山口銀行氏
一	同拾円	丸二商店氏
一	同五円	岩崎 亀太郎氏
一	同五円	松田 道作氏
一	同参円	宮川 利三郎氏
一	同参円	酒井 長次郎氏
一	同参円	木村 庄太郎氏
一	金参円	古田 万次郎氏
一	同参円	帝国商会氏
一	同貳円	中井 喜一郎氏
一	同貳円	神鳥 梅太郎氏
一	同貳円	堀 宇左衛門氏
一	同貳円	山下 鉄四郎氏

ノ金壹百五拾参円也

右、大正七年四月二差出ス

昭和参年

一 町内総代井上久左衛門氏、沓月二十五日御死去、菅昌之助引継ニ付、安田太七氏、平井禎治郎氏、菅昌之助三名立会、諸帳簿調査シ、必要事項左ニ記ス

一 町内財産 昭和二年十二月 総代安田太七氏ヨリ井上久左衛門氏ニ引継、当時ノ現在残高、左ノ通

街灯費

一 金五百円也

第三回京都市公債 住友銀行保護預ケ 手洗水町菅昌之助宛預リ証「〔未售〕井戸積立ヒ繰越」

一 金貳十五円九十九銭

住友銀行特別当座預 手洗水町代菅昌之助名義

一 金貳十五円八十六銭

近江銀行特別当座預 安田太七名義

一 金参百参拾貳円七十銭

山口銀行特別当座預 安田太七名義

ノ

親睦費

一 金八十三円四十七銭

近江銀行特別当座預 平井 常次郎 名義
井上久左衛門

一 金百七十八円

現金

ノ

町費

一 金百六十一円五十八銭

山口銀行特別当座預 平井常次郎名義

ノ

井戸積立

一 金四千円也

京都第三回市公債 住友銀行保護預ケ 菅昌之助名義

一 金百參十四円八十一錢

住友銀行特別当座預、菅昌之助名義

一 金百四十一円四十七錢

近江銀行特別当座預 井上久左衛門名義

ノ

一 旧帳簿ハ整理シ、新帳簿ニ記入繰越、自今左ノ帳簿ニ依リ処理ス

町内記録

出入簿

原簿

其他必要ナル旧帳簿及入用品ハ、伍頭、総代役中預品控帖ニ記載通り

一 町内集金割当明細、左ノ通 旧集金帳ヨリ抜粹

昭和二年四月ヨリ相改メ、毎月集金控

一 壱戸ニ付

本学区協議費

昭和五年ヨリ三十錢 訂正 学校納メ高

式十五錢
二十五錢

一 同

軍人会後援費

昭和五年ヨリ五錢 訂正

主一錢
三錢

一 同 祭典費 二十一錢

但シ、銀行ハ五十錢宛、丸二商店ハ二戸分

一 入学生徒一名ニ付 筆墨紙料 三十錢

一 手洗井家形修繕費及
神事提灯建 同 家持一戸ニ付 三十錢
借家一戸ニ付 十五錢

一 親睦費 一名ニ付 貳円

但シ、松田氏、川島氏、旭生命 加入ナシ

一 街灯費 間口一間ニ付 四十三錢

但シ、昭和二年一月ヨリ改正

一 町内諸経費及公同
衛生組長給料手当 同上二口ハ地所持主ヨリ
地価割及地坪割ニ出金

井上久左衛門氏 間口 六間七分

一 二円五十二錢 町費割

一 ^(永世)二円八十八錢^(永世) 街灯料割 ^(永世)「間違アリ、二円八十八錢ニ訂正
三月分ヨリ集金」

一 貳円 親睦費

メ七円十三錢
^(永世)「改メ 七円四十錢」

古田万次郎氏

間口 三間一分

一 六十四錢

町費割

一 壹円三十三錢

街灯費割

一 貳円

親睦費

ノ 参円九十七錢

阪東新一氏

間口 三間三分八厘

一 六十四錢

町費割

一 壹円四十五錢

街灯料割

一 貳円

親睦費

ノ 四円〇九錢

藤本銀行支店

間口 九間五分二厘

一 貳円五錢

町費割

一 四円九錢

街灯費

一 貳円

親睦費

ノ 八円十四錢

安田太七氏

間口 六間三分三厘

一	壹円七十七銭	町費割	
一	貳円七十二銭	街灯費	
一	貳円	親睦費	
	ノ六円四十九銭		
	祖父江商店氏	間口	四間七分二厘
一	九十四銭	町費割	
一	貳円三銭	街灯費	
一	貳円	親睦費	
	ノ四円九十七銭		
	十五銀行支店	間口	廿五間二分二厘
一	壹円六十五銭	町費割	
一	十円八十四銭	街灯費	
一	貳円	親睦費	
	ノ十四円四十九銭		
	川崎第百銀行支店	間口	十二間六分六厘
一	貳円〇壹銭	町費割	

〔町内記録〕にみる近代京都町自治の変遷（二）（西村・奥田）

一 五円四十七銭

街灯費

一 貳円

親睦費

ノ九円四十五銭

近江銀行支店

間口 十二間九分五厘

一 三円〇四銭

町費割

一 五円五十七銭

街灯費

一 貳円

親睦費

ノ十円六十一銭

平井禎治郎氏

間口 七間二分二厘

一 貳円四十銭

町費割

一 三円十銭

街灯費

一 貳円

親睦費

ノ七円五十銭

外二筆墨料 二

松田道作氏

間口 三間

一 六十四銭

町費割

一 壹円廿九銭

街灯費

一 〆 壹円九十三銭

外ニ筆墨料 二

菅昌之助氏

間口 四間七分三厘

一 壹円六十一銭

町費割

一 貳円三銭

街灯費

一 貳円

親睦費

〆 五円六十四銭

外ニ筆墨料 一

川嶋殿旭生命支店

間口 三間二分三厘

一 壹円廿三銭

町費割

一 壹円三十九銭

街灯費

〆 貳円六十貳銭

外ニ筆墨料 十

田中利左衛門氏

間口 六間

一 六十四銭

町費割

一 貳円五十八銭

街灯費

一 貳円

親睦費

〆 五円廿貳銭

外ニ筆墨料 一

丸二商店

間口 六間六分二厘

一 式円八十一錢

町費割

一 式円八十五錢

街灯費

一 式円

親睦費

ノ七円六十六錢

山口銀行支店

間口 十三間五分七厘

一 壹円六十錢

町費割

一 五円八十四錢

街灯費

一 式円

親睦費

ノ九円四十四錢

奈佐氏

一 十七錢

町費

大西氏

一 十錢

町費

岡田氏

一 三十四錢 同

富田庄氏
一 十七錢 同

斎藤氏
一 三十五錢

以上、毎月集金 計 百十円三十八錢

内訳 親睦費廿八円、街灯費五十五円十六錢、町費廿七円二十二錢

^{〔采書〕}
一 右毎月集金ハ、昭和三年三月ヨリ井上氏街灯料變更増加

左ノ通變更

毎月集金 金計ノ百十円六十五錢	内	
	親睦会	街灯費
	二十八円	五十五円四十三錢
	町費	二十七円二十二錢

一 代人料集金、左ノ通り

一 祖父江	重兵衛氏	金貳円	半季間
一 川島	与三郎氏	貳円	同

旧入費帳ヨリ抜粹

一	奥田	安藏氏	五円	同
一	斎藤	和三郎氏	壹円	同
一	山口	銀行支店	七円	同
一	近江	銀行支店	十円	同
一	川崎	第百銀行支店	七円	同
一	十五	銀行支店	十円	同
一	藤本	銀行支店	七円	同
一	金五十	壹円也	半季勘定毎ニ集金	

一 年中行事

一	一月	親睦会	正月早々「案内ハ十二月末ニスル事」 <small>(朱印)</small>
一	三月	施餓鬼	彼岸入
一	四月	御千度	初ノ日
一	六月	半季決算	八阪神社 <small>(マ)</small>
一	七月	神事	月末
一		吉符入	十二日午後三時湖月亭行
一		井戸替 灯灯建	十四日
一		右行灯ニ電灯工事ノ事、申込ハ数日前ニ	
一		井戸遥拝	十五日午前三時

一 御供 十七日及二十四日

一 御旅参り 十八日午後三時

一 親睦会 十八日御旅参りの後

一 九月 施餓鬼 彼岸入

一 十月 御千度 〔可相成水曜又ハ日曜〕
八坂神社 昼後早々

一 十二月 半季決算 総交代代

一 十月 時代祭 二十二日

二十一日ニ灯^{マデ}灯^{マデ}建、前ニ大松ノ命スル事

一 十二月 井戸 掃除 月末

一 昭和三年三月一日 従来銀行預金数口アリシモ、煩雜ニ付、出入帳記載ノ通り解約し、以後住友銀行京都支店一行とす

一 三月一日 旧帳簿ヨリ新帳へ繰越調査ノ為、安田太七氏、平井禎治郎氏立会引合ス、旧帳簿ハ平井氏方へ預ケ

三月一日

一 神事、施餓鬼、御千度、諸入費予算、左ニ抜粹ス

一 神事

七月十二日吉符入 一 湖月亭詠 一人前貳円五十錢

一 女中心付 四円

一 井戸開入用

水引紙 五十一錢

笹二本 一円卅錢

井戸人足三人 九円

同心付 六十錢

縄大小三筋 九十七錢

御酒 九十錢

釣瓶縄 壹円十九錢

ササラ 杓五本

シロ縄 竹ボーキ 六十錢

チマキ 三把 十五錢

飛魚 三 十五錢

あさうり 三 十五錢

榊 十五錢

小梅 昆布 廿錢

近江照 祇二 室町錦下ル東側中橋方

提灯建入用 大工 青井弘 三円七十錢

手伝 大松弘 五円廿錢

東洞院五条下 電話 電下二七九十一 次半 四五五七

灯灯屋 錦、烏角 六円五十五錢

富佐弘

〔米〕
〔引込施工費二個五円〕
十四日より二十四日迄電灯料壹円四十七銭

電灯工事費 六円四十参銭

電灯料 一円四十三銭

一 諸雜費

〔米〕
〔昭和三年度より改正 壹円〕

御旅神饌料 五十銭

両度供心付 壹円

行事より一回ニ
用人栄吉祝儀 壹円

〔米〕
〔同 中止〕

神事勘定ノ
弁当料 五円

入リノ部

清々講社補助金 四円

〔米〕
〔昭和三年度より中止〕

衍事二人ヨリ
御神酒料 土用

一 彼岸施餓鬼 春秋三月
九

一 施餓鬼料 五円

一 供養 壹円

一 茶料 五十銭

一 下男心付 廿銭

以上寺へ

一 弁当料 壹円廿銭替

津のり詔

一	昭和三年池ノ寮 すいもの、酒 席料共 六人ニテ九円余」 〔註〕	一	席料 酒代	六円位
		一	心付	壹円
一	御千度 春秋 十月	一	御祈禱料	壹円
		一	茶料	壹円
一	双林寺茶店席料	一	式円五十銭	
一	弁当	一	大 一円廿銭	
		一	小 三十五銭	
		一	津のり詔	
一	時代祭	一	酒	持参
一	井戸 掃除及七五三飾	一	〔マ〕 灯灯建出入 手間代 大松 弘	三円九十銭
一	其他	一	注連飾り代	一円廿銭
一	平井様へ 地料	一	謝儀 毎年末ニ	十円
一	其他	一	用人 心付 半季毎ニ	壹円
一		一	学校書記一人一円	

使丁四人、区役所小遣一、心付五十錢宛

三円五十錢

一 巡查派出所
夜電器ノ割 四円四十三錢

〔三〕三条大橋東三丁目下
津田竹治郎中二五八〇次
一軒十五錢ノ割

一 溝浚費 年三回 三月
七月 四円
十月

一 総代衛生係給料 六十円

一 総代

一 代人料 改正

昭和三年上半季ヨリ

〔未〕昭和三年下半季ヨリ取消

一 祖父江商店 金貳円

每半季

一 川島 与三郎 金貳円

同

〔未〕昭和三年下半季ヨリ取消改正

一 丸二商店 金「十一」円

同

〔未〕昭和四年度ヨリ改正

一 斎藤 和三郎 金壹円
「三円」

同

一 山口銀行支店 金十円

同

一 昭和銀行支店 金十円

同

一 川崎第百銀行支店 金十円

同

一 十五銀行支店 金十円

同

一 藤本銀行支店 金十円

同

昭和三年上半季決算

六月二十六日、総代菅昌之助方ニ会合、帳簿調査ス、町内財産左ノ通り

(貸方)

一金四千五百七十八円七十六銭

井戸積立金在高

一金貳百四十円十一銭⑤

町費 同

一金四百一十一円三十七銭

街灯費 同

一金貳百八十六円貳銭

親睦費 同

計ノ金五千五百十六円四十六銭

(借方)

一金四千五百円也

保管預 公債

一金六十八円八十銭

現金 残

一金九百四十七円六十四銭

銀行預金 残

計ノ金五千五百十六円四十六銭

右之通り帳簿引合候也

安田	太七
平井	禎治郎
田中	利八
古田	万次郎
祖父江	商店
坂東	新一

一 組長及行事ハ今後毎年抽籤ニテ交代（一ヶ年）
但し、年末勘定寄合ノ節

一 昭和三年度行事抽籤ノ結果、左ノ二氏当撰

祖父江商店
坂東 新一

一 明倫校改築ニ付、町内寄付左ノ通り 昭和三年六月

金参千円也	安田 太七
金三千円也	丸 二 商店
金五百円也	平井 禎次郎
金四百円也	古田 万次郎
金四百円也	田中 利左衛門
金参百円也	糸重商店出張所
金参百円也	阪東 新一
金参百円也	松田 道作
金壹千円也	井上 八重
金貳千円也	菅 昌之助

右ハ五カ年分割、毎月納付ノ事

一 町内用人

河村 卯三郎

右、昭和三年六月二十六日より雇

市内東山線松原南入
電話 下六五六四 取次ギ
月手当金十円

一 神事ニ付覚

七月初 井戸

注連繩
注文

大三間半
中二間半
小一間半
一円五錢

七月八日

一 井戸 電灯 会社へ十四日午後二時ニ施行申込

施行及引込料 二個ニテ五円

七月八日

一 井戸 笹付青竹二本 代一円五十錢 朱呂繩(能繩) 一把 十五錢

注文 十四日早朝入用

綾小路室町角 竹屋川本忠次郎

七月八日

一 井戸屋 三条大橋東二丁目若竹町 井戸わ 藤本

十四日早朝ヨリ井戸替 三人依頼ノ事

七月八日

一 手伝 東洞院龍泉寺五条下 大松 加納龜松

電話 下二七九四五五七 取次ギ

十四日早朝ヨリ提灯建依頼ノ事

七月八日	一	町内各位へ	十二日吉符入回章
同日	一	湖月亭へ	十二日吉符入詔ノ事
		料理 一人	貳円五十錢
		女中 二人	四円 心付
七月八日	一	水青樓へ	十八日ノ親睦会ニ付、席ヲ依頼ノ事
		料理五円位	
		近江榮へ御酌人三人依頼ノ事	
七月十二日	一	吉符入	総代内ニテ八阪神社 <small>（八坂）</small> の軸を奉載シテ、饌米及神酒ヲ供へ、午後二時ヨリ町内各位参拝シテ後チ、
		湖月亭行	当日朝 御神酒ノ奉香巻紙三 御幣紙 井戸用 三十六 錢御酒 九十錢 買入ノ事
七月十三日	一	井戸御供物其他買物	
		朝ウリ	三 九錢
		チマキ	三把 四十五錢 お福軒
		小梅	十錢
		飛魚	五枚 十五錢
		但シ、三枚入用ナレ共一把買	
		釣瓶縄	二十四錢 錦 清水ニテ
		タワシ	大二個 十四錢 同
		竹ボーキ	二十錢 同

柿 二十錢 六角 花屋

七月十四日 一 井戸替 井戸屋三人 手間三円宛

同 心付 廿錢宛

提灯建 片付共手間五円廿錢

大松 人

注連飾 (井戸屋) スル事

七月十四日 一 十八日ノ御旅参り後、町内親睦会

回章

七月十五日 一 井戸遥拝 午前三時

三宝台三個ニ 朝ウリ、チマキ、飛魚、各一個宛供へ

神酒 三 供

遥拝者ニ 小梅、昆布ヲ出ス

遥拝後、八坂神社参詣

七月十五日 一 蠟燭 町内提灯各一個ニ付

十五日夜用 中一

十六日、十七日用 大二 五本宛分配

二十三日、廿四日用 大二

大 洋 十二匁 一個 四錢 八十本

中 同 八匁 一個 三錢 二十本

七月十七日
二十四日

六角通寺町西入 岩井商店 三円八十錢払

一 供奉 午後、明倫校へ参集

十四日、清々講社ヨリ通知アリ

行事代用人行ク 町内ヨリ用人心付二回ニテ一円
行事ヨリ一回一円宛

七月十八日

一 御旅所参り、親睦会

午後三時、総代ニ集合、御旅参り後

神饌料 一円

参拝後引続キ親睦会

木屋町水青樓ニ開催

祝儀 用人へ 三円

水青樓へ 五円

同女中へ 五円

近江榮女中へ 五円

酌人三人へ 十円

町内用人、膳部ハ酌人並

一 井戸ハ十五日朝ヨリ門ヲ開き、

二十四日午後五時頃門を閉る事

十五日より二十四日迄毎朝門ヲ開き、^(四)晩十時締ル事

七月廿五日朝

一 提灯建取片付 大松

一 井戸 電球ハ取ハツシ、京都電灯会社へ返還 二個
一 大工 青井佐一郎 壬生新道松原上ル東側
電 本二五四五 次
室町錦下ル東側路次
申橋方

昭和三年下半季決算

十二月二十五日、総代菅昌之助方ニ町内一同会合、帳簿調査ス、現在町内財産左之通り

貸方

一金四千九百拾貳円六十八錢 井戸積立金 在高
一金壹百八十四円拾錢 町費積立 同
一金六十七円十八錢 街灯費積立 同
一金貳百六十八円貳十六錢 親睦費 同
計金五千四百參拾貳円貳十貳錢

借方

一金五百四十五円八十五錢 銀行預金 同
一金四千八百円也 保管預ケ 市公債有高
一金八十六円三十七錢 現金 同
計金五千四百參拾貳円貳拾貳錢

右之通り帳簿引合之上、旧組長菅より新組長糸重商店殿へ引渡ス

但し、町所有帳簿及道具類一切と共に

昭和三年十二月廿六日

一 昭和四年度組長及行事抽選ノ結果、左ノ通り当撰

組長

糸重商店

行事

井上八重

同

松田道作

一 町内伊勢講ハ、四年度より相改メ、組長及行事ノ御代参弐名とし、壹人旅費十円宛町費より支出ノ事ニ決定

一 昭和四年二月八日会合、左ノ通り決定ス

一 戸主御婚礼御祝 拾円

一 御家族御婚礼御祝 五円

一 戸主葬儀香儀 拾円

一 御家族同 五円

一 土地買得御祝 拾円

一 返礼ハ一切辞退ノ事

一 総代糸重商店辞退ニ付、抽籤ノ結果

昭和四年三月より

田中利八氏当撰

昭和四年二月末町内財産、左ノ通り

貸方

一金四千九百貳円七拾貳錢

井戸積立

一金百九拾參円八拾貳錢

町費積立

一金參拾四円七拾六錢

街灯費積立

一金百參拾五円四拾六錢

親睦費積立

計金五千貳百七拾六円七拾六錢

借方

一金參百八拾五円八拾五錢

銀行預金

一金四千七百円也

保管預

一金百円

市公債一通

一金貳拾參円參拾四錢

現金

計金五千貳百九円拾九錢

一金六拾七円五拾七錢

臨時費払借

總計金五千貳百七拾六円七拾六錢

右之通り、帳簿引合セ之上、旧組長糸重ヨリ新組長田中利八氏殿へ引渡ス
但シ、町所有帳簿及道具類一切ト共ニ

昭和四年二月廿七日

昭和四年六月廿六日

一代人料

一金拾円也

丸二商店

一金拾円也

山口銀行

一金拾円也

藤本銀行

一金拾円也

十五銀行

一金拾円也

昭和銀行

一金拾円也

川崎第百銀行

一金參円也

斎藤

一金拾円也

川島

一金貳円也

糸重

ノ

昭和四年六月廿八日午后三時半より拙宅ニ集会願ひ、会见検査を受く

田中 利八

手洗水町会計

昭和四年六月廿八日現在

貸方

金五千百四拾七円四十七銭

井戸積立

金貳百〇貳円十銭

町費

金參拾三円廿四銭

街灯費

金貳百四拾七円四十六銭

親睦費

ノ五千六百參拾円廿七銭

借方

金七拾貳円五十七銭

臨時費

金五百貳拾円六十銭

銀行預金

金四千九百円也

市債券

金百參拾七円十銭

現金

ノ五千六百參拾円廿七銭

右之通りニ御座候也

安田様他四名様ニ一覽ヲ願ひたり

昭和四年七月

十貳日 吉符入席

浄土寺 石橋町

十八日 親睦会

木屋町二条下ル

白水園

注連縄注文先

深泥方池 渡辺 又次

(朱書)

昭和四年拾月十五日

田中利八及平井禎次郎氏二人、伊勢代理参拝、拾七日、田中宅ニテ集合、拝シ、寺町大神宮へ拝詣

昭和四年十二月十三日 会合

田中利八宅にて

昭和五年度より街灯費三割引下げ

決定額

四円十銭

山口銀行

二円也

丸二商店

壹円八十銭

田中利八

壹円四十銭

菅

壹円也

川島

九十銭

松田

貳円^{十七}廿銭

平井

三円九十銭

昭和銀行

三円八十銭	川崎第百
七円六十銭	十五銀行
壹円四十銭	糸重
壹円九十銭	安田太七
貳円九十銭	藤本銀行
壹円也	坂東
九十銭	古田
貳円也	井上
ノ三八、八式	

昭和五年度組長及行事抽籤ノ結果

組長	古田万次郎
委員	平井禎次郎
同	井上 雄三

昭和四年十二月末に於ける町内財産、左の如し
貸方

一 金五千百四拾七円四十七銭	井戸積立
一 金六拾円九拾六銭	町費積立

一金四拾八円八拾二銭

街灯費積立

一金貳百三拾六円十三銭

親睦会費積立

一金六拾八円三十銭

利子利札

✂ 金五千五百六拾壹円六拾八銭也

借方

一金五百〇八円六拾銭

銀行預金

一金五千〇〇壹円九十三銭

債券

一金五拾壹円十五銭

現金

✂ 金五千五百六拾壹円六拾八銭也

尚、臨時費残高ハ利子及利札ノ部へ繰越セリ

昭和五年度より平井禎次郎氏、公同組長ニなられ、帳簿及保管品引渡したり

昭和四年十二月廿三日

田中利八

(にしむら たかし・同志社大学経済学部)

(おくだ いあり・同志社大学経済学部)